



2016年度 競技規則変更の概要

2016年1月10日

(公財) 日本ハンドボール協会競技運営委員会
審判委員会

2015年に開催された、男子 U-19 および U-21 世界選手権において競技規則変更の部分試行が行われた。その結果を踏まえ、11月6日ロシア・ソチにて IHF の会議が開催され、12月女子世界選手権における試行事項を下記のように決定した。結果的には競技規則の変更は採用されなかったが、同様の IHF からの通達には、来年度2016年7月1日より正式に競技規則を変更する方向が明記されていた。

これを踏まえ、(公財) 日本ハンドボール協会審判委員会では、国際スケジュールに合わせ、2016年7月1日より競技規則を下記の通り変更する。各ブロックおよび都道府県においては7月1日の完全移行に合わせて試行していく。

以下に変更点について記載する。2016年版の正式な競技規則書は IHF からの通知があり次第発行する予定である。

競技規則変更の概要

1 ゴールキーパーとコートプレイヤーの交代

- ①コート上にコートプレイヤーが同時に7名いることが許される。この場合、ゴールキーパーと交代するコートプレイヤーはゴールキーパーのユニフォームと同色にする必要はない。
- ②コート上に7名のコートプレイヤーがいる場合、誰もゴールキーパーの役割を担うことはできない。つまり、誰もゴールエリアに入りプレーすることが許されない。インプレー中にコートプレイヤーがゴールエリアに侵入し、明らかな得点チャンスを妨害した場合は 8:7(f) を適用し、7mスローを与える。
- ③競技規則 4:4 から 4:7 に示す、これまで通りの通常の交代も許される。この場合はゴールキーパーは存在し、チームは競技規則第5条（ゴールキーパー）および第6条（ゴールエリア）に示す権利を有する。
- ④コートプレイヤーが7名の状況で、そのチームにゴールキーパースローが与えられた場合は、そのうちの1名がゴールキーパーと交代し、ゴールキーパースローを行わなければならない。この場合レフェリーは、必要と判断すればタイムアウトを取ることができる。

2 選手が負傷した場合

競技規則 4:11 第 1 段落に関して、選手が負傷した場合は以下の要領で対処する。試合を円滑に進めるため、コート上での治療行為の時間を可能な限り減らすことを目的とする。

<レフェリーに対して>

- 明らかにコート上での治療行為が必要であるとレフェリーが判断したならば、レフェリーはゼスチャー 15（タイムアウト）,16（入場許可）を即座に示す。この場合、チーム役員はこの指示に従わなければならない、拒否することはできない。
- それ以外の場合、レフェリーはゼスチャー 16 を示す前に、プレーヤーに対して、「プレーを続けますか？」と問いかける。続けられないと答えた場合、レフェリーはゼスチャー 16 を示し、入場許可をする。
- プレーヤーやチーム役員がこの指示に従わなかった場合は、スポーツマンシップに反する行為として罰せられる。

<第 1 段落を、以下の通り改める>

- コート上で治療行為を受けたプレーヤーはコート外へ出なければならない。
- そのプレーヤーが再びコートへ戻れるのは、そのチームがその後 3 回の攻撃を終了させてからとなる。TD がこの状況に関して観察の責任を負う。
- 1 回の攻撃は、そのチームがボールを所持してから始まり、得点をするかボールの所持を失った時点で終了となる。
- ボールを所持している時点で、そのチームの選手に治療行為を行った場合は、1 回目の攻撃はその後の再開の笛から始まる。
- 3 回の攻撃が完了しないうちに、そのプレーヤーがコートへ入った場合は、不正交代となる。
- 段階的罰則の適用を受けた相手チームの違反行為の結果、コート上で治療行為をすることとなった場合は、上記の状況とは異なる。
- ゴールキーパーの頭部にボールがあたり、コート上で治療行為が必要となった場合も、上記の状況とは異なる。

3 パッシブプレー

<競技規則条文>

競技規則 7:11 7:12 はそのまま

競技規則解釈 4 の A, B, C, および E はそのまま

<競技規則解釈4 D を以下の通り改める>

- レフェリーは予告合図を出した後、狙いを定めた攻撃活動を認知できない場合はいつでもパッシブプレーの判定をすることができる。

- 予告合図のあと、攻撃側チームは最大6回まで、パスやシュートの機会が与えられる。(あくまで最大であり、6回になる前に判定をされることもあり得る)

- 6回のパスのあと、ゴールへのシュートがなかった場合、どちらか1方のレフェリーがパッシブプレーの判定をする(相手チームのフリースローとなる)。

- 途中攻撃側のチームにフリースローが与えられた場合でも、パスの回数は継続される。
- 攻撃側のシュートが防御側プレーヤーにブロックされた場合でも、パスの回数は継続される。

- 6回目の後、レフェリーがパッシブプレーの判定をする前に、防御側プレーヤーが違反をした場合は攻撃側にフリースローが与えられる。この場合、攻撃側には、直接にシュートを打つことに加え、攻撃を完了するため、フリースローから直接シュートを打つことを含め、さらに1回のスローをすることが許される。

- パスの回数は、競技規則 17:11 により、レフェリーの事実判定となる。予告合図の後、スローの回数を数えるなどの行為はないようにする(8:7(a)(b))。

4 終了間際

<確認>

- 「終了間際」を競技終了30秒以内と特に定める。
- この「終了間際」は、正規の競技時間に加え、延長戦にも適用する。

<競技規則 8:5, 8:6, 8:10(c)および(d) を以下に調整する>

- (1)「終了間際」とは「競技終了30秒前」のことである。

- (2)競技規則 8:10(c)に示される違反行為については、報告書を伴わない失格とする。また、相手に7mスローを与えなければならない。

- (3)競技規則 8:10(d)に該当する競技規則 8:5 の違反行為については、報告書を伴わない失格とする。また、相手チームに7mスローを与える。

- (4)競技規則 8:10(d)に該当する競技規則 8:6 の違反行為については、報告書を伴う失格とする。また、相手チームに7mスローを与える。

- (5)上記の(3)および(4)については以下の点も踏まえる
 - ①攻撃側プレーヤーが得点したならば、7mスローを与える必要はない。
 - ②攻撃側プレーヤーがパスをしたが、その後得点につなげることができなかった場合は、7mスローを与える。
 - ③攻撃側プレーヤーがパスをし、その後得点になったならば、7mスローを与える必要はない。

5 ブルーカード

<競技規則 16:8(8:6 および 8:10 に関連して) の最終段落を以下の通り改める>

- 報告書を伴う失格であるとレフェリーが判断したならば(レッドカードに加え)ブルーカードを示す。

- ブルーカードはレフェリーが持っておく(つまり3枚のカードを持ち備える)

- レフェリーはレッドカードを示した後、ペアで短時間の相談の後、必要であればブルーカードを示す